

3 「レーク65」栽培の手引き

(1) 品種の特性

- ①出穂期ならびに成熟期は「コシヒカリ」並。
- ②稈長は「キヌヒカリ」より5cm程度短く、強稈で倒伏しにくく、地力の高い所にも適する。
- ③「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」よりやや多収。
- ④粒厚が厚く、2.0mm以上の粒が多く、玄米千粒重は「コシヒカリ」よりやや大きい。
- ⑤夏期の高温下でも乳白・心白が出にくい。
- ⑥「コシヒカリ」と比べアミロース含量が2%程度低く、粘りがあり、「コシヒカリ」と同程度から優る極良食味。
- ⑦葉が直立し株は開張せず、葉色は濃い。
- ⑧直播栽培にも適する。

表VIII-3-1 特性一覧表

品種名	レーク65	標)コシヒカリ	比)キヌヒカリ
熟期	早生	早生	早生
草型	中間型	中間型	偏穂重型
出穂期(月日)	7.23	7.23	7.26
成熟期(月日)	8.29	8.28	8.31
稈長(cm)	72.4	88.6	77.7
穂長(cm)	17.3	19.0	18.2
穂数(本/m ²)	418	415	389
耐倒伏性	強	弱	強
葉いもち圃場抵抗性	中	弱	やや弱
穂いもち圃場抵抗性	中	弱	やや弱
穂発芽性	極難	難	やや易
精玄米重(kg/a)	55.0	53.5	54.1
同上比率(%)	103	100	101
千粒重(g)	22.0	21.1	21.3
外観品質(1~9)	4.4 (4.3)	4.8 (5.2)	5.3 (5.8)
乳白粒(0~5)	0.5 (0.7)	1.1 (1.3)	1.0 (1.0)
心白粒(0~5)	0.6 (0.6)	0.3 (0.4)	1.3 (1.4)

注1) 調査年次: 1998~2004年 調査場所: 農業技術振興センター(安土町大中) 移植期: 5月10日頃(中苗)

注2) 外観品質、乳白粒および心白粒の()内は高温年(1999,2001,2002,2004年)の平均

表VIII-3-2 穂の形態および茎数調査

品種名	粒着密度	2次枝梗		m ² 当 り 粗数 ×100	最高分 げ つ 期 茎 数* 本/m ²	有効 茎 歩 合** %
	粒/cm	1穂 粗 数	依 存 率 %			
レーク65	5.3	65	40	267	569	79
標) コシヒカリ	5.8	81	50	346	613	71
比) キヌヒカリ	6.2	81	48	329	571	70

注1) 調査年次: 2001年~2003年 5月10日植

注2) *6月30日前後の茎数 ** (穂数/最高分げつ期茎数)×100により算出

表Ⅷ-3-3 粒厚分布調査

品種名	粒厚別重量割合(%)						2.0mm以上の割合(%)
	<1.8mm	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2mm≤	
レーク65	1.0	5.0	12.3	36.8	38.5	6.4	81.7
標) コシヒカリ	4.5	17.8	36.1	36.0	5.0	0.5	41.5
比) キヌヒカリ	1.6	7.1	17.1	43.6	27.8	2.9	74.3

注1) 調査年次:2001年～2003年 5月10日植

注2) 供試した玄米は、縦線式米選機に2回かけたものを使用

(2) 収量構成要素の目安

目標収量 540kg/10a以上 $\begin{matrix} \text{穂数} \times & \text{一穂粒数} \times & \text{登熟歩合} \times & \text{千粒重} \\ 400\sim 420\text{本}/\text{m}^2 & 72\text{粒} & 85\% & 22.0\sim 22.5\text{g} \\ \text{m}^2\text{当たり粒数} : 28,000\sim 30,000\text{粒} \end{matrix}$

- ・穂数は、「コシヒカリ」並で、 m^2 当たり400本以上確保する。
- ・一穂粒数は、「コシヒカリ」および「キヌヒカリ」より少なく、 m^2 当粒数は少ないが、登熟歩合が高く、千粒重もやや大きいいため、収量は同等以上となる。

(3) 栽培のポイント

①栽培適地

- 地力中庸以上の平坦部に適する。
- 地力の低いところは、十分な生育を確保できず減収するので、栽培を避ける。

②移植時期および栽植密度等

- 茎数確保のため、移植時期は5月上旬、栽植密度は60～70株/坪が望ましい。
 - ・遅植えは茎数不足となることがあるので注意する。
 - ・大豆跡等で茎数が確保しやすいほ場では疎植を行ってもよい。
- 初期生育が十分確保できないと遅れ穂等により、成熟が揃わず品質が低下することがある。
- 直播栽培での播種量は過繁茂を防ぐため3kg(乾もみ)/10a程度とする。

③育苗

- 休眠が深く、発芽が遅いので、十分に浸種・催芽してから播種する。

④土づくり

- 稲体のケイ酸含有率を高めることで、籾の褐変と薄茶米の発生を軽減することができる。

⑤施肥

ア 施肥基準の考え方 (表Ⅷ-3-4)

- ・分けつのとりにすぎや肥効不足により穂肥前に栄養凋落をおこさない施肥量とする。
- ・葉色管理に努め著しい葉色低下を来さないよう注意する。
- ・地力の高い湖辺粘質でも、540kg/10a程度の収量を確保するためには、基肥は、全層で緩効性肥料を用いる場合で、3kgN/10aは必要。

イ 穂肥施用の考え方

- ・生育期間を通じて葉色は濃く推移する。幼穂形成期の葉色は「キヌヒカリ」等より濃くても、穂肥は出穂25日前(幼穂長1mm)に施用する(表Ⅷ-3-5)。

表Ⅷ-3-4 施肥基準

(kgN/10a)

			基 肥	追肥(6/10頃)	穂肥(25日前)	総 量
平 坦	全層	速効性	3	2	3～4	8～9
		緩効性	5	—	3	8
	側条	緩効性	4	—	3	7
甲 賀・ 湖辺粘質	全層	速効性	3～4	2	3	8～9
		緩効性	5～6	—	3	8～9
	側条	緩効性	4～5	—	3	7～8

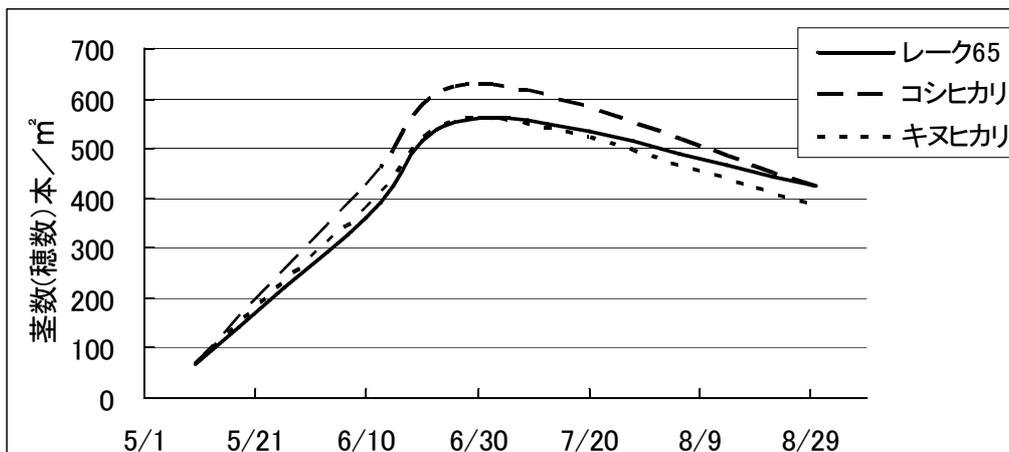
注) 緩効性：基肥に緩効度中(溶出日数50～100日)の肥効調節型肥料を用いた場合

表Ⅷ-3-5 幼穂形成期の葉色と穂肥施用の考え方

幼穂形成期の葉色 ()内は葉緑素計値	穂肥施用の考え方
濃い 5.0(41)以上	出穂25日前に基準量より1kg程度減らして施用(時期は遅らせない)
標準 4.5～5.0	出穂25日前に、基準量を施用
淡い 4.5(39)以下	3日程度早めて、基準量を施用 ・穂首分化期(出穂35日前)に葉色が5以下になった時は、 つなぎ肥をN成分1kg/10a程度施用する。

【参考】 茎数の目安

- ・無効茎歩が少なく、有効茎歩合は「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」より高い。
- ・穂数は「コシヒカリ」と同程度で、「キヌヒカリ」よりやや多い。



図Ⅷ-3-1 茎数の推移 (2001～2006年の平均: 農業技術振興センター)

⑥病害虫防除

○株が開張せず草丈も短いことから、紋枯病に罹病すると上位進展しやすい。

- ・前年発生が多かったほ場では育苗箱施薬を行う。
- ・発病を認めたら、病勢進展初期（幼穂形成期～穂ばらみ期）に薬剤を散布する。

○いもち病抵抗性は「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」より強いが、十分ではないので、常発地では注意する。

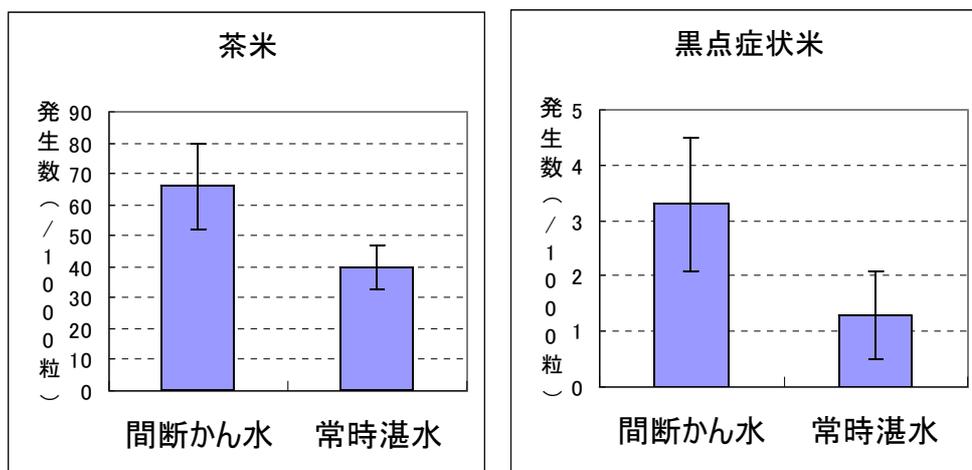
⑦水管理

○茶米や胴割れの発生を防ぐために、可能な限り出穂前後各3週間程度は常時湛水を保ち、その後も収穫直前まで間断かんがいをを行う。

- ・出穂前後各3週間の常時湛水で茶米、黒点症状米を軽減できる（図VIII-3-3）。



図VIII-3-2 水管理のイメージ



図VIII-3-3 出穂前後の水管理の違いが茶米、黒点症状米の発生に及ぼす影響
(滋賀農技セ2007年 ポット試験)

注) 1/5000ポットに定植した株を出穂4日後、9日後、14～16日後に高温風雨処理した。
水管理は7月初旬から8月末までの管理法。エラーバーは標準誤差を表す (n=5)。

⑧適期収穫

○成熟期までの葉色は濃く推移することが多く、施肥や地力によって変わることもあるので、成熟期は葉色で判断しない。

○収穫適期は、籾の色で判断する（籾黄化率85～90%が適期）。

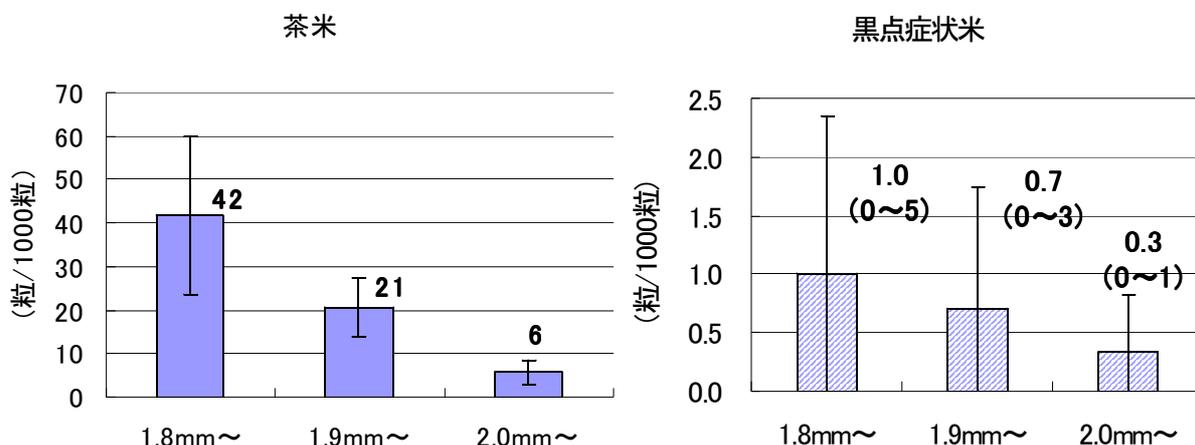
○夏季高温年は、登熟日数が短くなるので、収穫適期の判定を早めに行い、刈り遅れないように注意する。

⑨乾燥・調製

○乾燥は、一般品種に準じて行う。

○調製は1.9mm以上の網目を使用する。

・茶米や黒点症状米が多い場合は、2.0mmの網目を使用したり、色彩選別機を用いて、1等米に調製する（図Ⅷ-3-4、表Ⅷ-3-6）。



図Ⅷ-3-4 調製の網目と茶米、黒点症状米の発生割合（滋賀農技セ2007年）
エラーバーは標準誤差を表す（n=24）

表Ⅷ-3-6 粒厚1.9、2.0mm以上の割合および1.9、2.0mm以上の精玄米重

	粗玄米に占める粒厚の割合 (%)			精玄米重 (kg/10a)		
	1.8mm ≤	1.9mm ≤	2.0mm ≤	1.8mm ≤	1.9mm ≤	2.0mm ≤
レーク65	97.2	94.8	89.6	555	541	511
比または差	100	98	92	0	-14	-44
コシヒカリ	95.5	90.8	78.6	547	519	448
比または差	100	95	82	0	-28	-99

2005～2007年作期試験（滋賀農技セ）

レーク65：基肥3kgN/10a(LP複合C45)－穂肥3kgN/10a(NK化成C12)

コシヒカリ：基肥1.5kgN/10a(LP複合C45)－穂肥3kgN/10a(NK化成C12)

(4)食味特性

○アミロース含量が「コシヒカリ」よりも約2%低い。

○農業技術振興センターにおける食味官能試験では、玄米タンパク質含量※が7%程度でも総合食味評価値の低下は認められない。

○少肥料栽培を行って、収量が480kg/10aを下回り玄米タンパク質含量※が6.5%以下となるような場合では、食味が低下する傾向が見られる。

(※玄米タンパク質含量は含水率15%換算値)